

# 性同一性障害男児に抗ホルモン剤



抗ホルモン治療の説明を受けるため、病院に向かう男児（右）と母親＝18日午前、大阪府高槻市（撮影・笠原次郎）

# “発育抑制”重ねた議論

## 男児「男の子よりいい」

「うれしい。注射しても女の子になれないこと  
は分かっているけど、男の子になるよりいい」。

兵庫県播磨地方の小学6年生の男児12に、思春期の体の変化を一時的に止める治療を始めることが決まった。母親とともに同意書に署名した男児は、ほっとしたようにほほ笑んだ。（1面参照）

母親と歩く体は小さめ。思春期の患者は、体  
く、肩までの髪やスカークが心と反対の性に急速に  
ト姿は「女の子」。成長 成長して苦しみ、自殺を  
途上の健康体に抗ホルモ 考えるケースも多いとい  
ン剤を投与するのは、性 う。

同一性障害（GID）が しかし結果的に子ども  
世界保健機関（WHO） の発育を薬で左右する治  
も認める疾病であるた 療には、男児が通院する

小児性同一性障害（GID）患者に対し、抗ホル  
ルモン剤投与で第2次性 投与される抗ホルモン  
徴を抑える治療。専門医 剤「LHRHアナログ」  
にとっても未知の領域だ は、思春期早発症の小児  
が、重い副作用が起きる 患者にも使われてきた。  
可能性は低く、投与をや 1994年から製造販売

大阪医科大学内でも慎重な  
声があり、議論を重ねら  
れた。男児の主治医であ  
る康純・精神科准教授は  
「死にたいと言っている  
子どもだけに施す緊急避  
難的な治療にはしたくな  
かった。きちんとした診  
断に基づいた標準的治療  
として始めたかった」と、  
これまでを振り返る。

この日の診察では、男  
児自身が読めるよう、す  
べての漢字にふりがなを  
付けた説明書が渡され  
た。出現頻度の低いもの  
まで25の副作用につい  
て、「心筋梗塞（心臓に  
血液が流れにくくなって  
苦しくなります）」など  
易しい言葉で書かれてい  
た。

日本では、ホルモン療  
法が18歳、性器を外科的  
に変える性別適合手術が

する武田薬品工業（大阪  
市）によると、同症患者  
で心筋梗塞や脳梗塞など  
重い副作用の報告はな  
い。同剤は成長ホルモン  
などにも影響せず、体の  
成長は止めない。

20歳以上に限定されてい  
る。今回始まる投薬から  
ホルモン療法に移行すれ  
ば、心の性に合わせたよ  
り自然な体の変化が見込  
まれ、外見への効果が従  
来より高いとされる。

それでも康准教授は  
「第2次性徴の始まりを  
悲しまなければならぬ  
境遇を想像すべき」と説  
く。抗ホルモン剤を投与  
しても胸はふくらまな  
い。周囲の「同性」との  
違いに悩むのは変わらな  
いと指摘する。

日本精神神経学会によ  
ると、GIDで診察を受  
けた人は2007年末現  
在、延べ7177人。専  
門家によると、その多く  
は幼少期から性別に違和  
感を持っていたとみられ  
る。（霍見真一郎）

国内では未成年でGID  
と診断された場合、体  
の治療に慎重な姿勢がと  
られてきた。小児GID  
の診断は難しいとされ、  
すべての患者が大人にな  
るまで性別の違和感を持

# 大人までの猶予期間に

ち続けるとは限らないか  
らだ。塚田攻・埼玉医科  
大精神神経科講師は「第  
2次性徴期の体や心の変  
化のきっかけは、自分  
の存在を認めるための重  
要な過程。それを経験し  
ないことは、精神の成熟  
にとって負の要素になる  
のでは」とみる。

専門医によると、思春  
期早発症で抗ホルモン剤  
を投与された男児は女兒  
に比べ圧倒的に少なく、  
精果への影響は未知の部  
分があるという。しかし、  
ホルモン療法や性別適合  
手術に比べ、抗ホルモン  
剤の投与は少なくとも  
「後戻りできる」余地が  
残されている。

GID患者の受診が多  
い「はりまメンタルクリ  
ニック」（東京）の針間  
克己院長は「症状を見極  
め、的確な診断をするま  
での保留期間になる。治  
療は小児の診療体制がし  
っかりしていることが条  
件」と指摘。GID学会

理事長の中塚幹也岡山  
大教授は「将来どう生きて  
いくのか、自ら判断を下  
せる年齢に達するまで、  
考える時間ができる」と  
話す。（鎌田倫子）